

うちなー くどばみぐ い あらす はじ
沖繩ぬ言葉巡てぬ言一争いぬ始まい

しよーわじゅーゆ にんしんち にち いっちん
~ 昭和 1 4 (1939) 年 4 月 21 日ぬ一件 ~

2008 年 3 月

沖繩語研究家 船津好明

みんげー やなぎむねよし そーえつ たー うちなー むぬし ちゃー うち
「民芸」ぬ 柳宗悦 (宗悦) 達と沖繩ぬ物知りぬ 達とぬ、沖

なー くどばみぐ い あらす しよーわじゅーぐ にん めー じゅー
繩ぬ言葉巡てぬ言一争えー、昭和 1 5 (1940) 年やか前、1

ゆ にんしんち にち けんりつだい に こーとーじょがっこー う
4 (1939) 年 4 月 21 日、県立第二高等女学校をて起くたん。くり

はじ やくす かか ねー ぐと いっちの
が始まいやん。役所とぬ係わえー無ーんたる如ーん。くぬ一件ー

げっかんみんげーしよーわじゅーゆ にんはちちごー ペーじ ん
月刊民芸 昭和 1 4 (1939) 年 8 月号ぬ 52 頁んかい出じとーん。

よーしえ しちゃ とー ゆ なか し
うぬ様子ー下ぬ通いやしが、世ぬ中んかえー知らりらんでーる

ぐと
如ーん。

みんげー
(民芸)

やなぎそーえつ うちなー くどば や ㊦ くどふどがってん なら
柳宗悦「沖繩ぬすがいと言葉止みらすんで言る事程合点成ら

ぐと ね
ん事ー無ーらん。」

くぬ事 に付ーて、んまんかい居たる うちなー むぬし ちゃー
から、

がっての な ㊦ いちん うほー ん ちゅたーなー わ
合点ー成らんで言る意見ぬ 多く出じたん。うん人達名や分から

ん。

うちなー むぬし ちゃー
(沖繩ぬ物知りぬ 達)

むぬし えー ちゃ がっての な わ たーやー やまど
物知り A「うれー如何ーしん合点ー成らん。我っ達家をてー大和

ぐち はなし ぐど
口びけーじさーに 話 する如はまとーん。」

むめし びー やまと く うちなー ちゆ やまとぐち じゅーぶん
物知り B 「大和をて暮らちよーる沖繩ん人ぬ、大和口っし 十分

はなし な ゆい ちゃ ぐどくり りっしん うく
話ぬ成らん故に、如何ん如苦さそーが、また立身ぬ後りとー

がんで 言る事、解とーみしえーみ。如何ーしん大和口解らち、

やまと ちゆ うく ぐど な
大和ん人んかい後りらん如さんだれー成らん。」

むめし しー わ たーうちなー ちゆ なれ ぐどば にかし みしら
物知り C 「我っ達沖繩ん人ん、習ーん言葉ん、昔ぬ珍しーい

一品ーあらん。新さる世ぬ中んじえー、くぬ様な残とーる物ー捨

てりわど成ゆる。」

むめし ぞー わ たー なま やまとぐちかな ちか うちなー や
物知り D 「我っ達や今まで、大和口必じ使らち、沖繩すがい止

みらする如はまで来よーん。やくど、うんじゆなー考ーや受き

ーる事ー成らん。」

みんげー しちゃ ぐど
民芸やくりんかい下ぬ如いれーたん。

みんげー
(民芸)

かわい かんじろー わ たー やまとぐちや い
河井寛次郎 「我っ達や大和口止みりんで言ちよーるむのーあら

ん。大和口ー何処までんしーわど益しやる。やしがうぬ為な

い、何んで言ち沖繩口無ーん為すが。沖繩口んかえー昔ぬ大和

言葉ぬ多く残とーん。かーま昔ぬ言葉調べーる場所ん、沖繩ぬ

言葉ーいー例い成ゆん。語てん清らさるくぬ沖繩口何んで言ち

し捨てゆが。」

くん如っし言ちやい反ちやいさしが、河井ーくりんかい続き

やーに、物ぬ考一方に付て、下ぬ如言ちょーん。

かわいかんじろー
河井寛次郎「うんじゅなーぬ、言葉ん習ーん分別ん無ーらん如し

ぴりーし見じーねー、手はごーさん。ずーずー口ぬ東北ぬっ人ん、

さちま ちゅ
薩摩ぬっ人んしぴりてー居らんし見じみそーり。うちなー

りっぱ くどば なれ
立派な言葉ん習ーんあん。うんじゅなーや沖繩ぬ何しぴりゆが。

うんじゅなーや何んくーん ちぶる
頭さーにど かんげ
考ーとーみしえーの

ーあらに。うちなー ちゅ
沖繩ん人ぬいじりん、世ぬ中んかい出じゃさんだれ

ー、ちぶる なーか
頭ぬ中びけーじ成て、役ー立たん。

ほっかいどー うちなー まー まかね やー むぬ たまごどん てんどん
北海道から沖繩まで何処ぬ賄ー屋ぬ物ん、卵井と天井と

おや こんど
親子井とライスカレーと、諸ゆぬ品成とーん。ゆぬ如為すしえ

ぬー うむっさ とくるい
何ぬ面白が。所生ちかちど うちなー むぬ
沖繩ぬ物ぬある。沖繩生ちかち

ど うちなー ちゅ ちむくくる ぬく
沖繩ん人ぬ肝心ー残ゆる。

うく
後りとーんでち ちぶる
頭さーに思ー過じてー成らん。くん如ーる優

りとーる うちなー く
沖繩ぬ暮らしぬ、何んで言ち後りとーが。昨日ん知っ

ちょーるっ人ぬ家をて、活計さしが、あん如ーる活計胴ぬ家をて

ちゅく
作ゆーすんで、ゆ くとかんげ
言る事考ーて、見じーねー、うちなー く
沖繩ぬ暮らしぬ進ど

ーしが解ゆん。わか ぼーちゅー ゆす たぬ ぬぬう ちんのー
包中や余所んかい頼で、布織ゆしん巾縫ゆしん

ふか ちゅ
外ぬっ人んかいしみて、とーみちえ ふうさ
遠道ー膝さーねー歩かん如、車乗た

でんさぬ
い電車乗たいする暮らしえー何ーちんいーむのーあらん。

うちなー いるいる くと
沖繩ぬ色々な事んかえー、なーふんいじり出じゃしみそーり。

く むと な ふんとー ちゆ わか
暮らしぬ元成とーる本当ぬ清らさし解みそーり。

わ たー うちなー くどんかし みじら しな ぐとうむ むの
我っ達や沖繩ぬ事昔ぬ珍しー品ぬ如思とーる者ーあらん。

ぐどかんげ ゆるく うちなー く ふんとー
うん如考ーて、喜どーるむのーあらん。沖繩ぬ暮らしえー本当

りっば うやま ね な うちなー
立派やくど、敬いどそーる。くりが無ーん成ゆしえー、沖繩ん

ちゆ を な
人ぬ居らん成ゆしどゆぬむんどやる。」

いっちん ち じぶん しんぶん ちゃ ぐどか
くぬ一件に付ーて、うぬ時分ぬ新聞んかい如何ぬ如書かっ
ーがやーんで、思て、新聞かめーとーしが見ーあたらん。

じぶん ゆしだしえの けんちよーがくむ ぶ うまんちゆ く ま
くぬ時分ねー吉田嗣延ー県庁学務部をて、御万人ぬ暮らし益
し為する仕事さーに、大和口広みーしんかいはまとーたん。吉田

たー みんげー そえつ かわいたー い ぶんち
達や、くぬ民芸ぬ宗悦、河井達ぬ言ー分聞ちどんしえー、した
たかわじたる筈。あんし翌年ぬ昭和15(1940)年正月、また

ぐど う い あらす な
ゆぬ事ぬ起くやーに、まぎさる言ー争い成ゆん。

うちなー くとう ばみぐ い あらす はじ
 沖縄ぬ言葉巡ていぬ言一争いぬ始まい

しよーわじゅーゆ にんしんぐわち にち いっちな
 ~ 昭和 1 4 (1939) 年 4 月 21 日ぬ一件 ~

2008 年 3 月

沖縄語研究家 船津好明

みんげー やなぎむねよし そーえつ たー うちなー むぬし ちゃー
 「民芸」ぬ柳宗悦(宗悦)達とう沖縄ぬ物知りぬ達とうぬ、

うちなー くとう ばみぐ い あらす しよーわじゅーぐ にん めー
 沖縄ぬ言葉巡ていぬ言一争えー、昭和 1 5 (1940) 年やか前、

じゅーゆ にんしんぐわち にち けんりつだいに こーとーじょがっこー う
 1 4 (1939) 年 4 月 21 日、県立第二高等女学校をうてい起くた

ん。くりがはじ始まいやん。やくす にかか ねーんたるぐと
 ん。くりがはじ始まいやん。役所とうぬ係わえー無ーんたる如ーん。

いっちな げっかんみんげーしよーわじゅーゆ にんはちぐわちごー ペーじ
 くぬ一件一月刊民芸昭和 1 4 (1939) 年 8 月号ぬ 52 頁んか

い出じとーん。うぬ様子ー下ぬ通いやしが、ゆ なか し
 い出じとーん。うぬ様子ー下ぬ通いやしが、世ぬ中んかえー知

らりらんでーるぐと
 らりらんでーる如ーん。

みんげー
 (民芸)

やなぎそーえつ うちなー くとう ば や い くとうふどう
 柳宗悦「沖縄ぬすがいとう言葉止みらすんで、言う事程

がっていんな くと ね
 合点成らん事ー無ーらん。」

くぬ事 に付ーてい、んまんかい居たるをう うちなー むぬし ちゃー
 くぬ事に付ーてい、んまんかい居たる沖縄ぬ物知りぬ達か

ら、がっていの な いちん うほーん ちゅたーなー
 ら、合点ー成らんでい言う意見ぬ多く出じたん。うん人達名や

わ
 分からん。

うちなー むぬし ちゃー
 (沖縄ぬ物知りぬ達)

むぬし えー ちゃー がっていの な わ たーやー
 物知り A「うれー如何ーしん合点ー成らん。我っ達家をうてー

やまとうぐち はなし ぐとう
 大和口びけーじさーに話する如はまとーん。」

むぬし びー やまとう く うちなー ちゅ やまとうぐち
物知り B 「大和をうてい暮らちよーる 沖縄ん人ぬ、大和口っし

じゅーぶんはなし な ゆい ちゃ ぐとぅくり りっしん うく
十分話ぬ成らん故に、如何ん 如 苦さそーが、また立身ぬ後り

とーがんでい 言 事、解とーみしえーみ。如何ーしん 大和口解ら

ち、大和ん人んかい後りらん 如 さんだれー成らん。」

むぬし しー わ たーうちなー ちゅ なれ ぐとば んかし みじら
物知り C 「我っ達 沖縄ん人ん、習ーん 言葉ん、昔ぬ 珍 しーい

一品ーあらん。新さる世ぬ中んじえー、くぬ様な残とーる物ー捨

ていりわどう成ゆる。」

むぬし でいー わ たー なま やまとうぐちかな ちか うちなー
物知り D 「我っ達や今までい、大和口 必じ使らち、沖縄すが

い止みらする 如 はまでい来よーん。やくとぅ、うんじゅなー考

ーや受きーる事ー成らん。」

みんげー 民芸やくりんかい 下ぬ 如 いれーたん。

(みんげー
民芸)

かわい かんじろー わ たー やまとうぐちや い
河井寛次郎 「我っ達や大和口止みりんでい言ちよーるむのーあ

らん。大和口ー何処までいんしーわどう益しやる。やしがうぬ

たみ ぬー い うちなーぐちね な うちなーぐち
為なかい、何んでい言ち 沖縄口無ーん為すが。沖縄口んかえー

んかし やまとうぐとぅば うほー ぬく かんかし ぐとぅばしら
昔ぬ大和 言葉ぬ 多く残とーん。かーま 昔ぬ 言葉調びーる

ばす うちなー ぐとぅば たとぅ な かた ちゅ
場所ん、沖縄ぬ 言葉ーいー例い成ゆるん。語ていん 清らさるく

ぬ 沖縄口何んでい言ち捨ていゆが。」

くん 如っし言ちやい反ちやいさしが、河井ーくりんかい 続き

やーに、物ぬ 考ー方に付ーてい 下ぬ 如 言ちよーん。

かわい かんじろー 河井寛次郎「うんじゅなーぬ、言 葉 ン 習 ー ン 分 別 ン 無 ー らん 如

し ぴ り ー し 見 じ ー ね ー、 手 は ー さん。 ず ー ず ー 口 ぬ 東 北 ぬ っ
ち ゅ 人 ン、 薩 摩 ぬ っ 人 ン し ぴ り て ー 居 ー ら ン し 見 じ み そ ー り。 沖 縄 ン
か え ー 立 派 な 言 葉 ン 習 ー ン あ ン。 う ン じ ゅ な ー や 沖 縄 ぬ 何 し ぴ
り ゅ が。

う ン じ ゅ な ー や 何 ン く い ー ン 頭 さ ー に だ う 考 ー と ー み し え
ー の ー あ ら に。 沖 縄 ン 人 ぬ い じ り ン、 世 ぬ 中 ン か い 出 じ ゃ さん
だ れ ー、 頭 ぬ 中 び け ー じ 成 て い 役 ー 立 た ン。

ほ っ かい だ ー 北 海 道 ー 沖 縄 ー ま で い 何 処 ぬ 賄 ー 屋 ぬ 物 ン、 た ま ごと ン 卵 井 ー と う 天 井
と う 親 子 井 ー と う ラ イ ス カ レ ー と う、 諸 ぬ 品 成 と ー ン。 ゆ ぬ 如
な 為 す し え ー 何 ぬ 面 白 が。 所 生 ち か ち だ う 沖 縄 ぬ 物 ぬ あ る。 沖
縄 生 ち か ち だ う 沖 縄 ン 人 ぬ 肝 心 ー 残 ぬ る。

う っ 後 り と ー ン で い ち 頭 さ ー に 思 ー 過 じ て ー 成 ー ら ン。 く ン 如 ー ー
す ぐ 優 り と ー ン 沖 縄 ぬ 暮 ら し ぬ、 何 ン で い 言 ち 後 り と ー が。 昨 日 ン 知
っ ち ょ ー ー っ 人 ぬ 家 を っ て い 活 計 さ し が、 あ ン 如 ー ー 活 計
ど う ー や ー 胴 ぬ 家 を っ て い 作 ぬ ー す ン で い 言 ぬ 事 考 ー て い 見 じ ー ね ー、
う ち ぬ 沖 縄 ぬ 暮 ら し ぬ 進 だ ー し が 解 ぬ ン。 包 中 や 余 所 ン か い 頼 ぬ で い、
ぬ ぬ 布 織 ぬ し ン 巾 縫 ぬ し ン 外 ぬ っ 人 ン か い し み ぬ、 遠 道 ー 一 膝 さ
ー ね ー 一 歩 かん 如、 車 乗 たい 電 車 乗 たい する 暮 ら し え ー 何 ー ち
ん い ー ぬ の ー あ ら ン。

うちなー いるいる くとう
沖繩ぬ色々な事んかえー、なーふいんいじり出じゃしみそー

く むとうな ふんとー ちゅ わか
り。暮らしぬ元成とーる本当ぬ清らさし解みそーり。

わ たー うちなー くとうんかし みじら しな くとううむ むの
我っ達や沖繩ぬ事 昔ぬ珍しー品ぬ如思とーる者ーあら

ん。うん ぐとうかんげ ゆるく うちなー く
ん。うん如考ーてい喜どーるむのーあらん。沖繩ぬ暮らしえ

ふんとーりっば うやま
ー本当立派やくとう、敬いどうそーる。くりが無ーん成ゆしえ

うちなー ちゅ をう な
ー、沖繩ん人ぬ居らん成ゆしとうゆぬむんどうやる。」

いっちん ち じぶん しんぶん ちゃ ぐとうか
くぬ一件に付ーてい、うぬ時分ぬ新聞んかい如何ぬ如書かつ

とーがやーんでい思てい、新聞かめーとーしが見ーあたらん。

じぶん ゆしだしえの けんちよーがくむ ぶ うまんちゅ く
くぬ時分ねー吉田嗣延ー県庁学務部をうてい、御万人ぬ暮ら

しま な しくち やまとうぐちふいる
し益し為する仕事さーに、大和口広みーしんかいはまとーたん。

ゆしだ たー みんげー そーえつ かわいたー い ぶんち
吉田達や、くぬ民芸ぬ宗悦、河井達ぬ言ー分聞ちどうんしえー、

したたかわじたる筈。あんし ゆくどうし しょーわじゅーぐ にんそーぐわち
したたかわじたる筈。あんし翌年ぬ昭和15(1940)年正月、

またゆぬ ぐとう う い あらす な
またゆぬ事ぬ起くやーに、まぎさる言ー争い成ゆん。

沖縄文字一覧と用例

<p>と [tu] とい(鳥)、うと(音)、みーと(夫婦)</p>	<p>ゑ [hwe] ゑー(南)、にゑーでーびる(有難うございます)</p>
<p>と [to] とーふ(豆腐)、とーばる(桃園)</p>	<p>へ [he] へい(おい「目下への呼びかけ」)</p>
<p>ど [du] どし(友人)、やど(宿)、どー(自分)</p> <p>ど [do] どーぐ(道具)、まんどーん(たくさんある)</p>	<p>や [ʔja]* やー(君、お前)、やん(言わない)</p> <p>や [ja] やー(家)、やん(である)</p>
<p>て [ti] てーち(一つ)、てーだ(太陽)、てん(空)</p> <p>て [te] てーく(太鼓)、てーしち(大切)</p>	<p>ゆ [ʔju]* ゆん(言う)</p> <p>ゆ [ju] ゆんたく(おしゃべり)</p>
<p>て [di] ふて(筆)、ぬーてー(喉)、てきやー(秀才)</p> <p>で [de] でーじ(大変なこと)、ちよーでー(兄弟)</p>	<p>よ [ʔjo]* よーいー(おさな子)</p> <p>よ [jo] よーんなー(ゆっくり)</p>
<p>か [kwa] かじ(風)、かんない(雷)、かーま(遠方)</p>	<p>わ [ʔwa]* わー(豚)、わーちち(天気)</p> <p>わ [wa] わーむん(私のもの)</p>
<p>が [gwa] にんぶん(念願)、ぶんく(頑固)</p> <p>が [ga] がんちょー(眼鏡、めがね)、しがた(姿)</p>	<p>ゐ [ʔwi]* ゐー(上)、ゐーりきさん(面白い)</p> <p>ゐ [wi] ゐきが(男)、ゐなく(女)</p>

く [kwi] くー (声)、さつくー (咳)、 ぐゆん (呉れる)	ぎん [ʔwe] * ぎんーきー (金持ち)、ぎん ちゆ (ねずみ)
き [ki] きー (木)、きゆん (蹴る)、 きぶし (煙)	ぎん [ʔwe] ういぎんー (お祝)、わじゃぎん ー (災い)
ぐ [gwi] ぐーく (越来「地名」)	ん [ʔN] * んみ (梅)、んに (稲)、 んなじ (うなぎ)
ぎ [gi] かーぎ (容ぼう)	ん [ʔN] んに (胸)、んみ (嶺井「地 名」)、んなど (港)
ぐ [kwe] ぐー (鍬)、からじぐー (髪 きり虫)	い [ʔi] * いん (縁)、いだ (枝)
け [ke] けー (かゆ)、ちけー (使者)	い [ʔi] いん (犬)、いーび (指)、 いちゆん (行く)
ぐ [gwe] ぐったい (ぬかるみ)	ち [ʔu] * ちど (夫)、ちーじ (さと うきび)
げ [ge] げー (害)、にげー (願い)	う [ʔu] うど (音)、うーび (帯)
ぐ [hwa] ぐー (葉)、なーぐ (那覇)	え [ʔe] * えーま (八重山)、えーじ (八重洲)
は [ha] はる (畑)、はぎもー (荒地)	え [ʔe] えーさち (あいさつ)、え ーじ (合図)
ぐ [hwi] ぐじゃい (左)、ぐーど (い るか)	お [ʔo] おーじ (扇)、おーさん (青 い)
ひ [hi] ひやみかすん (えい、と言う)	を [ʔo] をーじ (王子)、をーれー (往来)

[]内は沖縄語辞典による読み方

* は単語の語頭だけに用います。語頭以外では用いません。

例 どい (鳥)、×どい

音の出だしに、僅かに i をひびかせます。

方言論争の始まり

~ 昭和 1 4 (1939) 年 4 月 2 1 日の出来事 ~

2008 年月

沖縄語研究家 船津好明

「民芸」の柳宗悦らと沖縄の知識階級の人との、沖縄の言葉を巡る論争は、昭和 1 5 (1940) 年より前、1 4 (1939) 年 4 月 2 1 日、県立第二高等女学校での座談会で起きた。これが最初である。役所は関係していないようだ。論争の様子は月刊民芸昭和 1 4 (1939) 年 8 月号の 52 頁に出ている。以下の通りだが、社会的には広がらなかったようだ。

(民芸)

柳宗悦「琉装と沖縄口の制限や廃止奨励のことほど解せぬことはない。」
これに対して、沖縄の識者から異議が続出した。識者の名は分からない。

(沖縄の識者)

識者 A「それは絶対に承服できない。私の家では標準語の外は一口も語らぬ様にしてゐる。」

識者 B「標準語を十分に語れない沖縄県人が他府県でどんな苦勞をし、出世が後れてゐるか。如何しても標準語を徹底して、後れぬ様にしなければならぬ。」

識者 C「われわれ沖縄県人や土地の風俗言語は骨董品ではない。新しい時代にはこんな取りのこされたものを捨てゝ行かねばならぬ。」

識者 D「私共今日まで標準語の奨励徹底、琉装の廃止につとめて来た面目上、今日の御説は受取れぬ。」

これに対して、民芸側が答えて

河井寛次郎「われわれは何も標準語を止めろといつてゐるのではない。之は徹底的に習得なさるがよろしい。しかし、その為は何故沖縄口を廃止しなければならないのか。大和言葉を今日、もっともよく保存して、古語の研究に生きた材料を供し、語るに美しいこの言葉を何故捨てねばならないのか。」

上のようなやり取りになっているが、河井は更に、次のように一般的所見を述べている。

河井寛次郎「一体、こちらの方々は言葉や風俗を無闇に卑下されて居るのは齒がゆい。見られよ、東北のずーずー弁の人が卑下したり、薩摩の人が卑下してゐるか。この素晴らしい風俗言語を有つ琉球の何を卑下するのか。」

皆様は何もかも頭丈で考へてをられるのではないか。民族主義といふ事にしても之を實際に置きかへて地方といふものを真に生かすより外は觀念に終るではないか。

北海道から琉球までどの食堂に入っても、卵丼と天丼と親子丼とライスカレーと皆一様の献立だ。そんな統一が何が面白い。土地が生きてこそ料理がある。地方が生きてこそ民族の生命がある。

後れてみると頭で観念してはならない。こんな素晴らしい琉球の生活が何でおくれてあるものか。昨日もある家庭の料理の御馳走になつたがあれだけのものを家庭の婦人が作れるといふ事はこの国の文化がどんなに高いかを示してゐる。料理は料理屋の仕事にまかせ、着物を織る事も縫ふ事も人にまかせ、遠道を歩くことも出来なくて自動車や電車にのみたよつてゐる都会の生活は決して高いものではない。

琉球の凡てにもつと自信をもつてもらひ度い。衣食住の根深い美しさを見なほしてもらひ度い。

われわれは何も骨董的に琉球を取扱つてゐるのではない。趣味として弄ぶのではない。ここの暮しは本質的に立派なものとして、之を敬愛せざるをえないからだ。これが亡ぶることは民族が亡ぶることだからだ。」

上記について、当時の新聞にどう出ているかを知ろうと、新聞を探しているが見当たらない。

この時期に吉田嗣延は県庁学務部にいて、県民の生活の改善や標準語の奨励に力を入れていた。吉田らが上記の宗悦や河井の話を知っていたら、激怒したに違いない。翌昭和15(1940)年1月、事は再発し本格的な論争に発展する。

〒1870002

東京都小平市花小金井 2-6-1

船津好明

Tel/Fax 042-467-1273

Email funatsu@mfv.biglobe.ne.jp